

## 2 具体的な事項に関する問い

## (1) 問題になることの多い漢字

## Q38 はねるか、とめるか(「木」・「きへん」など)

「木」という漢字の真ん中の縦画の最後を、はねるように書いたら誤りなのでしょうか。「きへん」の場合についても教えてください。

A 「木」や「きへん」は、はねて書かれていても誤りではありません。はねても、はねなくてもいい漢字は、ほかにも多数あります。

「字体についての解説」にも、両方の書き方があることが下記のように例示されています。これは、「きへん」の場合も同様に考えられます。

木 — 木 木

漢字の習得の段階では、「木」や「きへん」の付いた漢字について、はねのない字形が規範として示されることが多く、はねたら誤りであると考えている人も少なくないようですが、手書きの楷書では、はねる形で書く方が自然であるという考え方もあります。また、戦後の教科書には、両方の形が現れています。(近年、「木」を「木」のように書くと、根が土から出てしまって枯れてしまうから誤りであるなどと言われることがあります。これは、一定の字形を覚えるためには便利な比喻かもしれませんが、本来の字義や楷書の字形に揺れが生じた経緯とは無関係であり、伝統的な漢字の文化とは別のものです。) このことは、「のぎへん」や「うしへん」などについても同様です。平成26年度の「国語に関する世論調査」では、回答者の年代によって適切だと考える字形が異なる傾向があることが分かりましたが、その要因は、習った漢字の字形に違いがあることによるものとも考えられます。

学習者の発達の段階に応じた教育上の配慮等から、一方の書き方を指導する場合にも、本来は、どちらも適切な書き方であるということ、また、はねの有無は、それが漢字の字体に影響しない場合には、正誤の判断基準にならないということをしっかりと踏まえておくことが望ましいでしょう。

同様に考えられる漢字には次のような例があります。

机 机 和 和 牧 牧 少 少  
糸 糸 紅 紅 遠 遠 示 示

⇒参照 第2章4(5)ア[P.54]

## Q39 「いとへん」の下部の書き方

「絵」などの「いとへん」の下部分を「小」のような形ではなく、点を三つ並べるように書いているものをよく見掛けます。そのような書き方をしてもいいのでしょうか。

A 点を三つ並べるような書き方は、行書に近い手書きの習慣として定着してきたもので、日常生活において用いても、誤りではありません。

「字体についての解説」にも「いとへん」の書き方が下記のように例示されています。

糸 一 糸 糸

「いとへん」の下の部分について点を三つ並べるような書き方は、行書に近い楷書の習慣として定着してきたもので、日常生活においては、よく用いられる、誤りではない書き方であると言えます。

ただし、「糸」の形で書く場合とは書き順が変わることなどを考慮し、混乱を避けるために、学習者の発達の段階に応じた指導がなされる場合があります。そのような際にも、本来は、点を三つ並べるような書き方が誤ったものではないということを、よく踏まえておくことが望まれます。

なお、上記のような書き方が定着しているのは、「いとへん」の場合であり、「糸」を単独で書いたり、「糸」を「素」や「緊」のような位置に書いたりする際に、点を三つ並べるような書き方をする習慣はほとんどありませんから、避けた方が良いでしょう。

⇒**参照** 第2章4(2)ウ[P.43]

#### Q40 接触の有無（「右」など）

「右」の「口」は「ノ」の部分に接触するように書くべきでしょうか。それとも接触しないように書くべきでしょうか。

A どちらで書いてもよいものです。「右」という字に限らず、こうした接触の有無は、漢字の正誤の判断基準にはなりません。

複数の小学校の教科書に用いられている「右」という漢字を見比べてみると、「口」が左上の部分に接触しているものと、していないものとの両方が見られます。どちらの書き方をしても全く問題ありません。正誤の判断をする場合に、こういった微細な接触の有無を基準にすることは、行き過ぎであると考えられます。

右 右

同様に考えられる漢字に、「下」の3画目の点などをはじめ、次に挙げるようなものがあります。ここに挙げた例はほんの一部であり、他のどのような漢字についても、その漢字であると判別できない場合を除いて、接触の有無は正誤を判断する際の基準になりません。

下 下 文 文 文 無 無  
垂 垂 垂 病 病 究 究  
石 石 立 立 立 又 又

⇒**参照** 第2章2-2(2)[P.30], 4(3)[P.45]

**Q41 「木」と「ホ」(「保」など)**

私の名前には「保」という漢字が使われています。先日、住民票を取ったところ、「にんべん」に「口」＋「ホ」の形の「保」ではなく、「口」＋「木」の「保」という形で印刷されてきました。窓口の人は、これは同じ漢字であるというのですが、本当でしょうか。

**A** 同じ漢字です。印刷文字では、「口」＋「木」の形で表されるのが一般的ですが、手書きする場合には「口」＋「ホ」で書くこともあります。

「字体についての解説」にも、両方の書き方がることが下記のように例示されています。

保－保保

これは、手書き文字と印刷文字それぞれの習慣に基づく字形の相違であり、手書きの際には「ホ」の形で書くことがあります。明朝体では「木」で表されるのが一般的です。

片仮名の「ホ」がこの漢字の一部をとって生まれたことから分かるように、手書きの楷書では「口」＋「ホ」の「保」の形で書くことも多かったのですが、現在の印刷文字においては「口」＋「木」の形の「保」、また、小学校で学習する字形も「保」になっています。しかし、手で書く際には、どちらで書いても問題ありません。「葉」を「葉」と書いたり、「果」を「果」と書くのも同様です。「楽」、「親」、「探」、「巢」などについても、同様に考えることができます。

⇒参照 第2章4(3)ウ[P.48]

**Q42 「令」や「鈴」を手書きの楷書でどう書くか**

ある金融機関の窓口で書類に記入する際に「令」を小学校で習った形(「令」)で書いたら、明朝体と同じ形に書き直すように言われました。そうする必要があったのでしょうか。また、「鈴」、「冷」、「齡」といったほかの常用漢字や「伶」、「伶」、「玲」などの表外漢字の場合も同じように考えていいのでしょうか。

**A** 本来であれば、書き直す必要のないものです。印刷文字に見慣れてしまったため、手書きでは「令」と書く習慣があることが理解されにくくなっているのでしょうか。

「字体についての解説」にもこの書き方が例示されています。これは、手書き文字の字形と印刷文字の字形のそれぞれの習慣に基づく字形の相違であり、別の字ではありません。

令－令令

手書きの楷書によく見られる「令」と明朝体の「令」との間には字形の差があるものの、同じ字体であるとみなされてきました。なお、「令」のように手書きしてもかまいません。

また、質問のとおり、小学校ではこの漢字を「令」の字形で学習しています。その字形が社会で通用しない場合があるというのは、情報機器の普及等によって印刷された文字を見る機会の方が多くなっているからであろうと考えられます。本来、印刷文字の形のとおり到手書きする必要はなく、このことは、社会全体で共有される必要があります。

「令」に限らず、この形が漢字の一部になっているほかの常用漢字「領」、「鈴」、「冷」、「齡」などでも同様ですし、「伶」、「伶」、「玲」などの表外漢字(→Q4)についても同じように考

えることができるでしょう。

⇒参照 第2章4(6)エ[P.58]

### Q43 「女」の「一」と「ノ」の接し方

「女」という漢字の2画目は、3画目の横画よりも上に出ない形で書くようにと学校で習ったのですが、その書き方を間違いだという人もいます。どちらが正しいのでしょうか。

A どちらで書いても誤りではありません。昭和50年代半ば以降、小学校では出る形で教えられていますが、この場合、出るか出ないかは、正誤に関わる問題ではありません。

「字体についての解説」にも、両方の書き方があることが下記のように例示されています。これは、「おんなへん」の場合も同様に考えられます。

女 — 女 女

現在の小学校の教科書には、全て、2画目を3画目の横画よりも少し上に出す形の字形が示されています。しかし、小学校国語の教科書に用いられた教科書体を戦後すぐまで遡って調べていくと、昭和50年代の半ば頃までは、次に示すようにどちらの形も見受けられますから、世代ごとに見慣れている字形の方を正しいと考える傾向があるのかもしれません。

女 女 女 女 女

また、明朝体をはじめとする印刷文字では、出ない形が一般的です。一般の社会では印刷文字に触れる機会の方が多いため、印刷文字のように出ない形の方が正しいと考えている人もいます。これは、出ていると出ていなくても、あるいは、2画目と3画目が僅かに接していないとしても、誤りであるとは言えないものです。これらの違いは、それによって、ほかの漢字に見えたり、字として読み取れなかったりということがありませんから、漢字の正誤の判断基準になりません。同様に、点画が交差していてもいなくても、誤りであるとみなされないものとしては、次のような例が挙げられます。

耳 耳 長 長 弟 弟 非 非

ただし、交差の有無に関しては、注意が必要な場合もあります。例えば、「貫」、「慣」の「母」の部分は「母」、「毎」などと形が似ているために同じように書かれることがありますが、本来は交差するものではありません。「貫」や「慣」では、狭いところに書かれますから、交差していたとしても誤りであると断じる必要はないものの、書き分けるのが望ましいでしょう。

加えて、「工」と「土」、「矢」と「失」、「田」と「由」と「申」のように、縦画と横画が接するだけか、交差するかという字形の違いが字体の違いにまで及び、別の漢字とみなされることもあります。このようなものについては、しっかり書き分けないと誤りであると判断される場合があります。

⇒参照 第2章4(6)ア[P.56]

### Q44 「土」と「土」を構成要素として持つ漢字

「吉」という字の上の部分に「土」と書いてあるのを見ることがありますが、これは「吉」とは別の字でしょうか。また、「喜」という字の「土」を「土」と書いたり、「寺」の「土」を「土」と書いたりする文字を見ることがあります。そういう字は、誤りと考えていいのでしょうか。

**A** 手書きの楷書では、いろいろな書き方があるものの一つであると考えられます。ただし、「吉」と「吉」について、窓口業務等では使い分ける場合があります。

「吉」という字の上の部分に「土」と書いてあるものは、長く「吉」と同じ字として用いられてきました。従来、明朝体においては、「土」＋「口」の形が一般的でしたが、手書きの楷書では「土」＋「口」の形で「吉」のように書くことが多かった漢字です。したがって、例えば、「大吉」、「大安吉日」といった、一般の用語を手書きする場合に、「土」の形だけでなく「土」の形が用いられることがあります。これは、誤りではありません。

ただし、辞書には、「土」＋「口」の「吉」を俗字としているものもあります。また、この漢字は人名や地名に使われていることが多く、そのような場合には、固有名詞だからこそ「土」と「土」のいずれか一方で書かなくてはいけないと考えられる傾向があります。実際、窓口業務等においては、使い分けられる場合があります。

ほかに、「土」と「土」を構成要素として持つ漢字があります。「土」と「土」は、単独で用いられるときには、横画の長短がしっかり書き分けられますが（→Q21）、「喜」、「仕」、「寺」、「莊」など、漢字の一部になっているものについては、「土」と「土」が入れ替わったような形で書かれることがあります。そのような習慣を持つ漢字については、別の漢字に見間違えられることがないので、誤りであるとまで断じることはできないでしょう。

⇒**参照** 第2章4(1)オ[P.41]

### Q45 はねるか、とめるか（「改」など）

例えば、「改」という漢字の「己」の最後のように、印刷文字でははねていますが、学校でははねないと教わった漢字があります。どちらが正しいのでしょうか。

**A** どちらで書いても誤りではありません。手書きの楷書では、とめる書き方が多く見られますが、明朝体では、はねているのが一般的です。

「改」については、「字体についての解説」にも、両方の書き方があることが下記のように例示されています。

改 — 改 改 改

伝統的に、手書きの楷書では、明朝体のようにはねる形で書くことは少ないのですが、戦後の教科書にも、次のように、はねる形の例が見られます。どちらも誤りではありません。

改 改 改

はねるか、とめるかについて、同様に考えられる部分を持った漢字には「役」、「化」、「起」、「空」、「指」、「酒」、「切」、「比」、「陸」などを挙げることができます。

また、「字体についての解説」に示されているとおり、「改」の3画目や「切」の2画目などは、右上方向に折ってぬくように書かれることもあります。

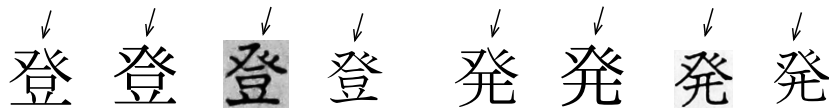
⇒参照 第2章4(5)イ[P.55]

#### Q46 「はつがしら」の接触の有無

「登」と「発」では、「はつがしら」の上部を離すか接するかがそれぞれ決まっていて、違う書き方をすると教わった記憶があります。使い分けが必要ですか。

A 使い分けの必要はなく、どちらの字をどちらの書き方で書いても誤りではありません。明朝体や教科書体など、印刷文字のデザイン差が影響していると考えられます。

明朝体や教科書体など、印刷文字によっては、「はつがしら」の上部が接触していたり離れていたたりすることがあります。



これは、飽くまでも印刷文字のデザイン差に類するものであり、手書きの際にはどちらの書き方をしてもよいものです。「登」と「発」とで使い分けるような必要もなく、どちらも正しい書き方です。

⇒参照 第2章2-1(2)[P.26], 2-2(2)[P.30], 4(3)カ[P.49]

#### Q47 とめるか、はねるか、はらうか（「園」「猿」など）

「園」や「遠」という漢字の「袁」と、「猿」という漢字の「袁」では、下の部分の表し方が違っていることがありますが、これは使い分ける必要があるのでしょうか。

A 狭いところではとめ、余裕のある場合にははねる傾向がありますが、どちらの書き方をしても誤りではありません。



「園」「遠」「猿」ともに、下部の縦画については、とめて書いても、はねて書いてもその文字の字体としては誤りではなく、正誤の判断を左右しません。また、「袁」の最終画についても、とめて書いても、はらって書いても誤りではありません。

慣用として、「園」や「遠」のように、上下を他の点画で囲まれるなど、狭いところに「袁」の形がある場合には、下部の縦画をとめている場合が多く、「猿」のように、比較的広いところにある場合には、はねたりはらったりしているという傾向があります。しかし、いずれの書き方をしても正誤の判断には関係しません。これは、「環」「還」などでも同様です。

⇒参照 第2章4(5)ア[P.54]

**Q48 「奏」の下の部分の書き方**

「奏」という漢字の下部分を「夭」で書いたら誤りでしょうか。

**A** 誤りではありません。「夭」の下横画を長く書く形だけでなく、上の横画を右から左にはらって「夭」のように書かれる場合もあります。

「奏」の下部には「夭」のような部分があり、上の横画よりも、下の方を長く書くのが一般的です。しかし、現代の慣用では、「夭」という字は上を長くするように書く傾向があります。「奏」では、上の横画の方が短くなるなどの理由から「夭」の形に思えず、「夭」であると考えの人が少なくないようです。また、「奏」を「夭」の形で書いた例は戦前からあり、昭和10年頃に用いられた文部省活字（「奏」）のほか、戦後に編まれた漢和辞典にも、「夭」の形を採用しているものがあります。

「夭」の形で書くと、この部分の1画目は、右から左にはらうように書くこととなりますが、それによって字体の枠組みから外れてしまうことはありませんから、誤りであるとまで考えるのは行き過ぎでしょう。

また、「夭」という字だけを取り上げれば、上の横画を長く書くことも多いですから、「奏」が上の長い「夭」の形で書かれることがあっても誤りとは言えないでしょう。

⇒**参照** 第2章4(2)イ[P.43]

**Q49 「者」には点がなく、「箸」にはあるのはなぜか**

印刷された文字を見ると、「者」や「都」という漢字には「日」の上に点がないのに、「箸」や「賭」には点があるのはどうしてですか。また、それを使い分ける必要があるのですか。

**A** 点がある「箸」と「賭」は、いわゆる康熙字典体です。平成22年の常用漢字表の改定で追加された際に、この字体が採用されました。手書きでは、点を打たない書き方ができます。

昭和24年に内閣告示として行われた「当用漢字字体表」以前の印刷文字は、康熙字典体（→Q8）が用いられるのが一般的で、通常、「者」や「都」にも「箸」、「賭」と同様に点がありました。しかし、当用漢字字体表で点画の整理や統合が行われた結果、当用漢字表に採用された「者」、「都」の点は省略されました。一方、当用漢字表に採用されなかった「箸」、「賭」などの漢字については、特に手当てが行われず、昭和56年の常用漢字表でもそれは同様でした。

その後、平成12年に国語審議会が「表外漢字字体表」を答申し、常用漢字表に入っていない漢字を印刷で用いる際の標準の字体（印刷標準字体）を定めました。その際には、書籍を中心とした漢字の使用実態を調査し、それぞれの漢字について、実際に最も多く用いられている字体を選ぶこととしました。その結果、「表外漢字字体表」には、「箸」、「賭」も含め、主に康熙字典体が採用されたのです。そして、平成22年の常用漢字表の改定に当たって「箸」、「賭」が追加された際にも、「表外漢字字体表」の字体がそのまま採用されました。

以上のような経緯があり、常用漢字表の表内において、「者」、「都」と「箸」、「賭」では、「日」の上の点の有無という違いが生じています。印刷文字においては、常用漢字表に掲げられたそれぞれの字体を用いることとされていますが、「箸」、「賭」を手書きする際には、点を付けなくて書いてもかまいません。

なお、「者」、「都」に点の付いた字体は、いわゆる康熙字典体として扱われるため、人名などを除き、印刷文字においても、手書き文字においても、現在は用いないのが一般的です。

⇒**参照** 第2章5(2)[P.60]

### Q50 「填」か「𪛗」か（文字コードとの関係）

電子辞書で「補填」という言葉を調べようとしたら、常用漢字表の「填」とは違う「𪛗」という形が出てきました。どうしてこういうことが起きるのでしょうか。また、手で書くときにはどちらを書けばいいのでしょうか。

**A** 文字コードの制約によるものです。印刷文字としては「𪛗」が通用字体ですが、古い機種等では使えない場合があります。手で書く場合は、どちらで書いてもかまいません。

これは、情報機器に搭載されている文字コードの制約によるものです。新しい情報機器では、「填」と「𪛗」が共に使えるようになっていますが、現在のところ、まだ改められたJISコードに対応したコードポイントやフォントを搭載していない情報機器も流通していますし、対応していても、「𪛗」の方が変換候補の上位にあり選びやすくなっていることがあり、質問のようなことが起きています。

JISコードが初めて制定されたのは、昭和53年（1978年）のことです。その後、昭和56年（1981年）には常用漢字表が内閣告示として実施されます。この常用漢字表では「常用漢字表に掲げていない漢字の字体に対して、新たに、表内の漢字の字体に準じた整理を及ぼすかどうかの問題については、当面、特定の方向を示さず、各分野における慎重な検討にまっことし」（国語審議会答申「常用漢字表」 昭和56年3月23日）、常用漢字表に入っていない漢字（表外漢字 → Q4）の字体については、その目安を定めることを留保していました。

国語審議会が表外漢字の字体について留保している間、国語施策の方針が示されないまま、昭和58年（1983年）にJISコードが改定され、一部の表外漢字の字体は、康熙字典体とは異なった字体に変更されました。「填」もそのうちの一つで、このときに「𪛗」という字体に変更されています。変更後の字体は、「拡張新字体」「準用字体」などと呼ばれました。この字体には、手書きを中心として古くから使われてきたものも含まれています。

その後しばらくの間、書籍には「補填」という字体が使われているのに、コンピューターなどの情報機器には「補填」しか出てこないという状況が続き、不統一を問題視する声が上がります。この問題を收拾するために、国語審議会が平成12年（2000年）に「表外漢字字体表」を答申し、印刷文字における標準の字体（印刷標準字体）を決定しました。その際には、社会で実際に用いられている漢字の字体を広く調査した結果として、「𪛗」という字体が採用されます。JISコードも同年行われた拡張で、第3水準に「𪛗」という字体を追加しました。現在は「表外漢字字体表」の印刷標準字体が情報機器においても使用されるようになっています。

平成22年の常用漢字表の改定で追加された際には、表外漢字字体表に従って「𪛗」が通用字体として採用されています。漢字を手書きする場合には「填」と書くこともできますが、印刷文字としては「𪛗」が通用字体となります。ただし、現行の常用漢字表の「表の見方及び使い方」の「付」には「情報機器に搭載されている印刷文字字体の関係で、本表の通用字体とは異なる字体（通用字体の「頬・賭・剥」に対する「頬・賭・剥」など）を使用することとは差し支えない」とあり、当面は印刷文字においても「填」と共に「𪛗」が用いられる状



況が続くと考えられます。

⇒**参照** 第2章5[P.59]

### Q51 「牙」と「芽」

「牙」という字は「芽」の下部分のように書いてはいけないのですか。また、その反対に「芽」の下部分を「牙」のように書くのはどうですか。

**A** 一般的には、どちらも誤りではありません。ただし、「芽」は小学校で学ぶ字ですから、画数が変わる点については、教育上の配慮が必要な場合があると考えられます。

「牙」を「芽」の「くさかんむり」の下部分と同じように書いても誤りではありません。常用漢字表では、「牙」の明朝体に「特定の字種に適用されるデザイン差」が適用されており、「芽」の下部分と同様のものもデザイン差として認められていることを、そのまま手書き文字にも当てはめて考えることができるからです。

一方、「芽」については、下の部分が4画の「牙」の字体は、デザイン差として示されていません。これは印刷文字としては、「くさかんむり」＋「牙」の形を、別の字体であるとみなし区別しているということを意味します。しかし、手で書く場合には、「芽」の下部を「牙」の形で書くのは、自然な運筆によるものであり、そのように書かれていても、誤りであるとはする必要はないでしょう。特に、行書や行書に近い楷書では、「牙」のように書かれるのが一般的であるとも言えます。

ただし、小学校では「芽」の下部分を5画で書くように学習しますから、画数が変わってしまう「くさかんむり」＋「牙」の書き方が問題とされることがあり、教育上の配慮が必要になる場合があります。同じ構成要素を持つ「雅」や「邪」などを含め、両者の字体が使い分けられていることは意識しておくといよいでしょう。

⇒**参照** 第2章2－1(4)[P.29], 5(3)[P.61]

### Q52 画数の変わる書き方（「衷」）

「折衷」の「衷」という字は、真ん中の縦画が「一」と「口」を貫くように書かれているものや、「なべぶた」（「冫」）の部分が独立して書かれているものを見ます。また、縦画が「中」のように下まで貫かれているものを見ることもあります。どのように書けばいいのでしょうか。

**A** 「一」→「口」→縦画が「口」の底辺まで届く書き方、のほかに、「口」を貫いて「中」のようになる書き方や、「冫」→「口」→縦画という書き方もあります。

当用漢字字体表において、「衷」は次のように示されました。

衷

平成22年の常用漢字表に掲げられた通用字体が「衷」であるように、現在の多くの明朝体では、縦画が横画（「一」）の上から「口」を貫き、底辺でとまる形になっています。しかし、この字の成り立ちが「衣」の間に「中」という字が入っている形であることから、辞書が示す字形の中には、「冫」→「口」→縦画、の形や、縦画が「中」のような形に貫かれたも

のも見られます。これらの違いは画数に影響する場合があるので、「衷」は辞書によって9画とされたり10画とされたりします。また、字形の違いを字体の違いに及ぶと判断して、それぞれを異体の関係として扱う辞書もあります。

常用漢字表が掲げる「衷」の通用字体も、当用漢字字体表を基にしており、字体を変更したわけではありません。したがって、両者の間に見られる字形の違いは、印刷文字のデザイン差とみなされます。また、手書きの楷書の場合、辞書によって画数の扱いが異なることから、次に示すような書き方は、いずれも誤りではありません。

衷 衷 衷 衷

### Q53 同じ字体の別字種（「芸」、「柿」）

「芸」や「柿」という漢字が、全く違う読み方と意味で使われることがあると聞きました。これはどういうことでしょうか。

**A** 戦後の字体の整理やJISコードとの関係などによって、常用漢字と同じ字体を持っている（又はそのように見える）のに、別の字として用いられている漢字があります。

「芸」や「柿」に対する「芸」（うん）や「柿」（こけら）のように、常用漢字と同じ字体を持っている、又は、そのように見えるのに、漢和辞典などでは、別の字種とされているものがあります。

「芸」（げい）は、元々「藝」と書かれていました。この字種の字体として、昭和24年の当用漢字字体表に「芸」という形が示されて以降、「藝」に代わって広く用いられるようになっていきます。しかし、「芸」はそれ以前から用いられていた「芸」（うん）という表外漢字と同じ字体であるため、現在では、一つの字体が、二つの字種に用いられるという状況が生じています。なお、「芸」（うん）の場合には、あえて「くさかんむり」を「𦰩」のように書いて区別することもあります。

一方、「柿」（かき）と「柿」（こけら）とは、本来、同じ字体ではありません。通常、「かき」は、つくり（右側の部分）の上部の「なべぶた」型の下に「巾」の形が表される5画です。「こけら」は、中央の縦画が貫く形で4画になっています。

柿 (かき) → 𦰩      柿 (こけら) → 𦰩

しかし、両者は字体が似ているために、その区別は曖昧になることも多く、同じように用いられる傾向がありました。（明朝体においては、そのデザイン上、辞書等が示す画数とは異なって見える場合が少なくありません。）また、広く情報機器に搭載されてきたJISコードでも、両者を同じ区点に割り当てている（「包摂する」と呼ばれます。）ため、機種やフォントによっては使い分けができない場合があります。そのようなこともあって、二つの字は、同じ字体であると捉える考え方が生じています。なお、日本をはじめ、中国、韓国など漢字圏の国々で用いられる漢字を含んだ国際的な文字コード規格であるユニコードでは、両者が別の区点に割り当てられており、使い分けが可能です。このQ53の説明では、御覧のとおり使い分けています。

## (2) いろいろな書き方があるもの

## Q54 明朝体どおりの手書き（折り方など）

例えば「糸」の1, 2画目や「衣」の4画目などについて、手書きするときにも、明朝体のような折り方で書いたら誤りですか。明朝体のように書いてもよいのだとすると、それぞれの漢字の画数は変わるのでしょうか。

A 明朝体の形のとおり到手書きされた文字を誤りであるとまでは言えませんが、手書きではよりふさわしい書き方があります。また、明朝体のように書いても、画数は変わりません。

1画が2画に見える明朝体のとおり到手書きされても、字体を見誤ることはないで、誤った字であるとまでは言えないでしょう。「糸」という漢字については、昭和50年代初めまでの小学校国語の教科書では、次に示すような、明朝体の折り方に似た教科書体が用いられていた例もあり、このような字形で手書きする習慣のある人も少なくありません。

糸 糸 糸 糸 糸

しかし、「糸」や「衣」を手書きするときには「糸」、「衣」のように書いた方が、辞書等が示す画数と同じように見えて自然であり、これらの明朝体と手書きでは、画数が異なっているわけではありません。これは印刷文字におけるデザイン上の表現であり、2画に見えても1画とみなすものです。漢字の習得の段階では、混乱しないような書き方を覚えるのが望ましいでしょう。また、辞書を画数から引くような場合にも、この点には注意が必要です。そのほかにも、次に挙げるように、辞書等による画数と異なって見えるものは多数あります。

医 引 山 雲 越

また、次に示すそれぞれの右側の印刷文字のように、画数が少なく見えるデザインもあります。この場合、手書きで同じように書くと、字体が異なるとみなされるおそれがあります。

姉一姉 店一店 美一美

近年、印刷文字のとおりに書かないといけないという意識が広がっています。印刷文字のとおりに書かれていても、字体が読み取れるのであれば誤りとせず、それとは別に、印刷文字と手書きの楷書とでは、表し方に違いがあることを学ぶ機会を提供するのが適当でしょう。

ただし、次のような手書きの文字については、折り方の表現が明朝体に似ているように見えても、全て1画で書かれたものであり、手書きの楷書として自然な書き方です。

糸 糸 糸 衣 衣 衣

なお、明朝体と手書きの字形との関係で注意を要する別の例に「離」や「璃」の「厶」の部分があります。これを手書きする場合には「厶」の形で、次のとおり書く習慣があります。

離 離 璃 璃

上に示した手書きの例ではそのように見えませんが、「離」や「璃」の「厶」の部分は、「康熙字典」をはじめ多くの辞書等で3画に数えられます。この場合、明朝体の「厶」の形は、「公」などに見られる折り方の表現とは違い、辞書等のとおり3画とみなせます。ただし、手書き

においては、辞書等が示す画数とは異なるように見える形で書かれるのが一般的です。

また、この部分は「偶」の右下部などと同様の形だと考えられることもありますが、従来、両者は書き分けられてきました。明朝体のおりに、又は「厶」のように書いても誤りであるとは言えないものの、「離」や「璃」では、「厶」の形で手書きすると覚えておきましょう。

⇒**参照** 第2章2-1(3)[P.27], 2-2(3)[P.31], 3(1)[P.33]

### Q55 明朝体どおりの手書き（筆押さえなど）

常用漢字表の「八」という字の2画目には、屋根のような部分がありますが、これは手書きするときにも書くべきですか。

**A** 手書きでは書かないのが一般的です。屋根のように見える部分は、「筆押さえ」などと言い、印刷文字に特有の装飾表現ですから、そのとおりに手書きするのはかえって不自然です。

常用漢字表の通用字体の「八」に見られる屋根のような部分は、「筆押さえ」などと呼ばれ、活字のデザインにおける装飾的な要素です。筆押さえによる字形の違いは、字体の違いに及ぶものではありません。また、元々、筆の勢いをデザイン的に表現したものではありますが、飽くまでも、印刷文字における字形の特徴であり、手書きの際に書く必要はありません。ほかに「芝」や「乏」などにも筆押さえが見られます。これらを手書きする際に、明朝体に倣って筆押さえが強調されて書かれることがあります。本来、その必要はありません。ただし、筆押さえが書いてあるからといって、誤りであるとまでは言えないでしょう。

なお、明朝体であれば、必ず「筆押さえ」があるというわけではありません。屋根のような部分のないもの（「八」）ものもあります。近年作られる明朝体フォントにおいては、「筆押さえ」の表現を用いることが少なくなっていますから、見慣れない人も少なくないでしょう。当指針の字形比較表の「印刷文字の字形の例」欄には、常用漢字表の通用字体との間で、デザイン上の差異が認められる明朝体を掲出しており、そこには「筆押さえ」の付いたデザインのあるものも含まれていますから、参考にしてください。

⇒**参照** 第2章3(3)[P.35]

### Q56 明朝体どおりの手書き（曲直、その他）

「子」という字は、手書きでは、縦の線を曲げて「𠂔」のように書きますが、明朝体では縦の画が直線になっていることに気付きました。同様に、「家」の最後の2画の位置や「たけかんむり」の形、「心」の点の位置など、明朝体と手で書くときとでは、形の違うものがあります。明朝体のおりに書いてもいいのでしょうか。

**A** 明朝体のおりに書いても、漢字の骨組みが読み取れないわけではありませんから、誤りとまでは言えません。しかし、手書きでは手書きの習慣に従って書くのが一般的です。

「子」という字を手書きするときには、緩やかに曲げるように書くのが一般的ですが、明朝体をはじめとする印刷文字では、縦画を直線的に表現します。これも、手書き文字の字形と印刷文字の字形との間の習慣の違いです。ほかに、「手」、「了」などがあります。

子 — 𠂔      手 — 手      了 — 了

同様に、明朝体の字形には、手書きする場合の習慣と異なる特徴的な表し方が見られることがあります。「字体についての解説」には、そのほかにも、明朝体と手書きの楷書とでの表し方が異なるものとして次のような例が示されています。いずれも、ふだんはなかなか気付きませんが、両者をよく見比べると、字形に違いがあることが分かります。

人 - 人      家 - 家      北 - 北  
 々 - 々      心 - 心

これらの漢字が手書きされる際に、活字のとおりに書かれたとしても、その字であるかどうか判断できないわけではありませんから、誤りであるとまでは言えません。しかし、それぞれ右に示された手書きの楷書の習慣に従って書かれるのが一般的です。

⇒参照 第2章3(2)[P.35](4)[P.36](5)[P.37], 4(6)イ[P.57]

### Q57 手書きでの「しんにゅう」の書き方

常用漢字表の「しんにゅう」の字には点が一つのものや二つのものがありますが、これらを手書きするときにも、点の数は書き分けないといけないのですか。

A 手書きでは、どちらも点一つで書くことができ、常用漢字表はその書き方を勧めています。ただし、印刷文字の通用字体が点二つのものを二つで手書きしても、誤りとは言えません。

常用漢字表の表の見方及び使い方には「し」も手書きでは「し」と同様に「し」と書くこと、つまり、点一つで書いて、2画目を揺するように表現して書くことが説明されています。また、「改定常用漢字表」(文化審議会答申)の「I 基本的な考え方」には、「「しんにゅう」の印刷文字字形である「し／し」に関して付言すれば、どちらの印刷文字字形であっても、手書き字形としては同じ「し」の形で書くことが一般的である、という認識を社会全般に普及していく必要がある。」との記述もあります。

ただし、戸籍などにおいては、点一つの「しんにゅう」「し」(「し」)と二つの「しんにゅう」「し」(「し・し」)との使い分けが行われることがあります。点二つのものを「し・し」のように書いたものも誤りとまではすべきではありません。

なお、明朝体のように、点一つで揺すらない形(「し」)で手書きされたようなものも、字体の違いにまで及んでいとは言えず、誤りであると断じることができません。

⇒参照 第2章3(5)[P.37], 5(2)[P.60]

### Q58 横画の長短

楷書の手本を見ていたら、「天」の下横画の方が長い字や、「幸」の1番下の横画が一つ上の横画よりも長い字などがありました。そのような書き方をしてもいいのでしょうか。

A いずれの書き方も、手書きの楷書では伝統的に用いられてきた形であり、誤りではありません。戦後から昭和50年代に掛けて用いられた教科書にも、そのような字形が見られます。

手書きの楷書では、横画の長短が違ふ、次のような書き方をすることがあります。古くは、

「天」も「幸」も、下に挙げる例の右側の方で書かれるのが一般的でした。

天 天 天 幸 幸 幸

戦後の教科書を複数確認すると、横画の長短に違いがあるものが見られます。

天 天 天 幸 幸 幸

「天」や「幸」だけでなく、点画における長短の違いが漢字の判別に関わらない場合には、それを誤りであるとは言えません。一方、「土」と「土」や「末」と「末」のように、点画の長短が入れ替わることによって別の字になってしまう場合には注意が必要です。

⇒参照 第2章4(1)ア[P.38]イ[P.39]

### Q59 上下部分の幅の長短など、構成要素同士の関係

「冒」の「日」と「目」の幅を、上下逆に書いたら間違いですか。

A その漢字としての骨組みを読み取ることができず、他の漢字と見間違えるような場合には、誤りと言えるでしょう。

常用漢字表には、「筆写の楷書では、いろいろな書き方があるもの」の一つとして、「長短に関する例」が挙がっています。「冒」の上部と下部の幅について、この「長短に関する例」の一つとして考えた場合、例えば、次の左から二つ目に示すように、上下の幅の差が小さい又は同じくらいになる場合には他の漢字と見間違えることは少ないと考えられます。しかし、左から三つ目の場合は、「冒」という字の骨組みを読み取ることは難しく、「昌<sup>しょう</sup>」（人名用漢字）などと間違えられるおそれがあります。

冒 冒 昌

このように、上部よりも下部の幅がはつきりと大きいように書かれた例については、「冒」という漢字の字体の枠組みを外れてしまい、この文字としては認めがたいものとみなされるでしょう。ここでは、構成要素における幅の長短について例示しましたが、ほかの漢字に関しても、構成要素の位置関係やバランスが大きく変わっている場合、誤った字であるとみなされることがありますから注意が必要です。(→Q15)

⇒参照 第2章4(1)ウ[P.40]

### Q60 横画の方向

「比」や「化」の右側の横画は、左から右にとめるように書いても、右から左にはらうように書いてもいいのですか。

A どちらで書くこともあります。かつては使い分ける習慣もありましたが、現在はどちらの書き方をしても誤りとは言えません。

かつては、「比」や「北」では左から右に書いてとめる、「化」や「花」では右から左にはらう、という習慣がありましたが、明朝体では、いずれの字もはらうようにデザインされることが多く、現在は手書きする際にも、それぞれどちらの書き方もあるというのが常用漢字

表の考え方です。

比 比 北 北 化 化 花 花

また、それぞれの漢字の終筆についても、手書きの楷書では「比」、「北」などはとめる書き方、「化」、「花」などははねる書き方をするという習慣がありましたが、現在は、それぞれどちらの書き方をしても誤りではありません。

なお、「字体についての解説」には、左から右にとめるように書くことも、右から左下方向にはらうように書くこともある部分を持った漢字として、「風」、「仰」も例示されています。そのほか、「橋」、「系」、「考」、「属」なども、同じように考えられるでしょう。

ただし、「干」と「千」、「天」と「夭」のように、その違いによって別の字になってしまう場合には注意が必要です。

⇒参照 第2章4(2)イ[P.43]

### Q61 点や短い画における方向の違いや接触の有無

「しめすへん」（「ネ」）や「主」などの1画目は、垂直になっているもの、斜めになっているもの、また、それぞれ下にある横画に接しているもの、接していないものを見ることがあります。ほかにも、四つの点が同じ方向を向いている「れんが」（「ㄣ」）などもよく見掛けます。それらについては、どのように考えればいいのでしょうか。

A 手書きの楷書では、点や短い画を書く際に、方向や接触の仕方が異なっている場合があります。その漢字としての骨組みを読み取ることができれば、誤りではありません。

「字体についての解説」には、「筆写の楷書では、いろいろな書き方があるもの」の「方向に関する例」に次のような例が挙げられています。

ネ 一 ネ ネ ネ 一 ネ ネ  
主 一 主 主 年 一 年 年 年

このように、手書きの楷書で点や短い画を書く際には、方向や接触の仕方にいろいろな形が生じます。これらは、どちらの書き方をしても誤りではありません。このほか、手書きの楷書で点や短い画の方向についていろいろな書き方があるものとしては、次のような例が挙げられます。

字 字 集 集 広 広 交 交  
魚 魚 鳥 鳥 既 既 直 直

また、点の方向と接触の仕方の組合せに、決まったものがあるわけではありません。例えば、次のように、上に示した例とは異なる書き方をしても、誤りではありません。

字 字 集 集 広 広 交 交

⇒参照 第2章4(2)[P.41](3)ア[P.45]

## Q62 つけるか、はなすか①

「字体についての解説」の「つけるか、はなすかに関する例」に、横画が右の縦画から離れている「月」が例示されていますが、1画ずつをしっかりと書く楷書でも、そういう書き方が許されるのでしょうか。

A 手書きの楷書では、そのような書き方をすることがあります。「月」に限らず、このような点画の接触の有無は、漢字の正誤に関わりません。

漢字辞典によっては、横画が右の縦画から離れている「月」を旧字体とする例がありますが、そのような書き方をしても誤りではありません。「字体についての解説」にも、つけるか、はなすかについて、「月」の3、4画目の横画が右の縦画から離れている形が次のように例示されています。

月 — 月 月

その漢字としての骨組みを読み取ることができないほどに離れている場合を除いて、手書きの楷書にはよく見られる書き方です。これは「月」のほか、「日」、「目」、「田」、「ヨ」などの構成要素を持つ漢字について、同様に考えることができます。

ただし、「日」を「日」のように書くと、表外漢字の「日」（えつ・いわく）と似た形になります。「日」は、横幅を広くして表される（「日」）ことが多いですが、どちらの字であるかを文脈から読み取ることが必要な場合があるかもしれません。

⇒参照 第2章4(3)イ[P.46]

## Q63 つけるか、はなすか②

「字体についての解説」の「つけるか、はなすかに関する例」には挙がっていないものに、「口」や「月」などの1画目と2画目が離れているような書き方があります。1画ずつをしっかりと書く楷書でも、そういう書き方が許されるのでしょうか。

A 手書きの楷書では、そのような書き方をすることがあります。「口」や「月」に限らず、このような点画の接触の有無は、漢字の正誤に関わりません。

その漢字としての骨組みを読み取ることができないほどに離れていなければ、そのような書き方をしても誤りではありません。

口 月 田 用

これは「口」や「月」のほか、「日」、「目」、「田」、「用」、「国」などの構成要素を持つ漢字をはじめ、多くの漢字について、同様に考えることができます。



**Q64 方向、つけるか、はなすか**

「言」の1画目と2画目は、例えば、「文」や「応」の1, 2画目と同じように書いてはいけないのでしょうか。また、「言」の1画目を左上から2画目に接するような形で書くのはどうでしょうか。

**A** 「言」の形で書かれることが多いですが、いずれの書き方をしても誤りとは言えません。「文」や「応」を「ㄣ」のように書くこともあります。

「言」は現代の慣用として「言」の形で書かれることが多いですが、1, 2画目を「なべぶた」(「ㄣ」), 「まだれ」(「ㄣ」), 「うかんむり」(「ㄣ」)などを手書きする際によく使われる形(「ㄣ」)と同じように書いても、あるいは、明朝体のように書いても、誤りではありません。これらの書き方は「字体についての解説」にも次のように例示されています。

言 — 言 言 言

また、1画目が左上から斜めの画で書かれている場合に、2画目と接していたとしても、さらには、「ノ」のように右上から斜めの画で書かれていたとしても、別の字とみなされるようなことはありませんから、誤っているとまでは言えないでしょう。「なべぶた」, 「まだれ」, 「うかんむり」の1画目とその下の横画を「ㄣ」のように書くこともあります。

なお、「字体についての解説」には、上に示した「言」と並んで「主」が示されていますが、1画目が短い横画になった手書きの形は示されていません。

主 — 主 主

「主」をはじめ、「なべぶた」, 「まだれ」, 「うかんむり」などの1画目を、上に示した「言」の手書き文字「言」と同じような短い横画で書く習慣はほとんどありません。字体を見誤ることはないのですが、誤りであるとまでは言えませんが、別に考えるべきでしょう。

⇒参照 第2章4(3)ア[P.45]

**Q65 接触の位置**

「白」や「自」という漢字の1画目の「ノ」が「日」や「目」と接触する位置は、決まっているのでしょうか。例えば、左の縦画の先端に接触するように書いたら誤りですか。

**A** 厳密に決まっているものではありません。「白」や「自」に限らず、このような点画の接触の位置は、漢字の正誤に関わりません。

例えば、接触の位置について、以下に挙げるような例は、いずれも誤りではないものです。

白 白 白 自 自 自

同様に、接触の位置が正誤の判断基準にならないものとしては、次のような例があります。

丘 丘 救 救 春 春 訊 訊

このような点画の接触の位置については、その漢字としての骨組みを読み取ることができないほどである場合はともかく、漢字の判別に関わらないような違いをもって、誤りであると考えるのは行き過ぎでしょう。

⇒**参照** 第2章4(6)ウ[P.57]

### Q66 接触の仕方（「口」と「日」の最終画）

手書きの楷書では、「口」の右下の部分と、「日」の右下の部分では、画の接し方が違うと聞きました。書き分けなくてはいけないのでしょうか。

**A** そのような書き分けが意識されることはありますが、書き分けるかどうかは、文字の正誤に関わりません。

下に示したように、四方を囲むような形を書くときの習慣として、「口」や「中」のように、2画目のすぐ後に下部の横画を書く場合には、縦棒の下に付いて、少し外に出るように最後の横画を書き、「日」や「田」など、2画目の後に、別の画を書いてから下部の横画を書く場合には、2画目の終筆より少し上のところに付くように最後の横画を書くという習慣があります。このように書くことは、文字を書く動作（手や筆記具の動き）の合理性に由来するものと考えられています。



このような書き方は、文字を手書きする上での慣用であり、長年行われてきた文字を書く動作の合理性という点では意味がありますが、正誤の判断には関わりません。

### Q67 接触の仕方（「就」、「蹴」など）

「就」という字の右側は「尢」のように書かないといけないのでしょうか。

**A** 一旦横に書いてから下ろす書き方が正しいというのは誤解です。むしろ、本来は「尢」のように書くものです。

近年、「尢」のように、極端に表現すれば「乙」のような形に書かないと誤りであるという誤解が広がっています。

これは主として、手書きの楷書を基に作られた印刷文字などにおける始筆の筆押さえが横画であると捉えられてしまうことによって生じている誤解です。本来は、次に示す「就」に見られるとおり、「尢」あるいは「尢」のように、軽く接する程度の形で書くものであり、正誤の判断を行う際には、注意が必要です。

就 就

なお、筆押さえが大きくなってしまっている「尢」のような字形についても、漢字の判別に影響しないという意味で、誤りであるとまで考えるのは行き過ぎでしょう。

同様に考えられる漢字として「概」、「既」、「蹴」、「沈」、「枕」などが挙げられます。

⇒**参照** 第2章4(6)ウ[P.57]

## Q68 はらうか、とめるか

「木」や「林」, 「数」や「枚」などの最後の画などは、はらって書くのが普通だと思いますが、押さえてとめるような書き方を見ることがあります。右にはらって書く余裕がある場合にも、そのような書き方をしてもいいのでしょうか。

A 右側に空間が十分にある場合にははらう書き方をすることが多いですが、とめて書いても誤りではありません。特に、文字を縦書きするような場合にはよく現れる書き方です。

上記のような漢字の最終画などを書く際に、右側に空間が十分にある場合には、はらう書き方をする方が多いと考えられますが、次のようにとめるような書き方をしても誤りではありません。また、このようにとめて書く場合、その画の始筆を離して書くこともよくあります。

林 ← 数 ←

縦書きで、最後の画が書かれた後に、筆記用具が次の漢字の始筆に向かうような場合、大きく右に払うのではなく、最終画の終筆をとめて書くことで、次の文字の始筆に入りやすくなるようなこともあります。横書きや単独で書かれる場合にそのような形になったとしても、誤りではありません。

⇒参照 第2章4(4)ア[P.50]

## Q69 はらうか、とめるか（狭いところ）

「因」という字の「大」の3画目や「困」という字の「木」の4画目をはらうように書く人ととめるように書く人がいます。どちらでもいいのですか。

A どちらで書いても誤りではありませんが、筆を運ぶ方向が広く空いている場合には、はらって書くのが一般的なものでも、狭いところではとめて書く習慣があります。

「大」や「木」は、単独の場合には最後の画をはらって書くのが一般的ですが、そのような形が、狭い部分にあるような場合には、終筆をとめて書く習慣があります。このようにとめて書く場合、始筆を離して書くこともよくあります。

恩 ← 恩 ← 困 ← 困 ←

「因」や「困」のほかに、次のような漢字も例として挙げられます。

医 ← 医 ← 季 ← 季 ← 返 ← 返 ←

こうした手書きの字形間の違いと同様のものは、次に示す「医」のように、明朝体におけるデザイン差としても見られることがあります。また、「因」のように、各社の教科書を比較すると、漢字によっては、狭いところではらうかとめるかが、異なっている場合もあります。

医 ← 医 ← 因 ← 因 ←

どちらの書き方をしても、正誤を左右するような字体の違いには当たらないので、狭いところにあるのにはらうように書いたら誤りだということではありません。また、はらう方向

が広く空いている場合にも、とめるような書き方をすることがあります。(→Q68)

⇒**参照** 第2章4(4)ア[P.50]

### Q70 はらうか、とめるか（横画・縦画）

「耳」の5画目は右上方向にはらうような字と、とめるように書く字を見ることがあります。また、「角」の3画目の縦画は、活字でははらっていますが、とめるように書かれているものを見ることがあります。どちらで書いてもいいのでしょうか。

**A** どちらの書き方も、手書きの楷書によく見られるものです。どちらで書いても誤りではありません。

「耳」の5画目は、明朝体では右上方向にはらうように表現されるのが一般的ですが、手で書く場合にはとめるように書かれることがあります。

耳 耳

次のような漢字も、同様の例として挙げられます。

域 域 式 式

また、「角」の3画目は、明朝体では左方向にはらうように表現されるのが一般的ですが、手で書く場合には、まっすぐとめるように書かれることがあります。「字体についての解説」にも次のように例示されています。

角 角 角

次のような漢字も、同様の例として挙げられます。

骨 骨 周 周

手書きの楷書においては、いずれの書き方をしても誤りではありません。

⇒**参照** 第2章4(4)イ[P.51], ウ[P.52]

### Q71 とめるか、ぬくか（最終の縦画）

「十」の2画目をぬくように書いた字を見ることがありますが、本来はとめるべきではないのでしょうか。

**A** どちらの書き方も、手書きの楷書によく見られるものです。明朝体ではとめるように表されていますが、手書きの場合、最終の縦画をぬくように書くのも適切な書き方です。

次に示す形は、どちらも正しい書き方です。

十 十

明朝体では、縦画の終筆は原則としてとめるように表され、ぬけるような形ではありません。ふだん見慣れている印刷文字がとめた表し方になっているために、ぬいてはいけないと感じる人もいるようですが、最終画となる縦画においては、どちらも適切な書き方です。ほ

かに、次のような漢字も例として挙げられます。

許 許 布 布 都 都

また、漢字の最終画だけでなく、漢字の構成要素の最後に書かれる縦画でも同様のことが言える場合があります。次のような漢字が例として挙げられます。

戒 戒 連 連

⇒参照 第2章4(4)エ[P.53]

### Q72 はねるか、とめるか(「てへん」など)

「字体についての解説」には「うしへん」(「牛」)の縦画をとめた形で書いてもはねた形で書いてもよいことが例示されていますが、「てへん」(「オ」)をはねないで書くのは誤りでしょうか。

**A** 「てへん」は、筆の運びからするとはねる方が自然ですし、はねる書き方が慣用として定着しています。しかし、とめる書き方をしても、誤りであるとまでは言えません。

「てへん」の縦画の終筆をはねないで書いても、字体を見誤ることはないので、誤った字であるとまでは言えないでしょう。

「干」という漢字をはねて書くと「干<sup>う</sup>」という別字になります。これは、とめているかはねているかによって、別の漢字として判別される例です。しかし、次に示す「折」は、どちらで書いても、他の漢字として読み間違えられることはありません。漢字の判別に関わらないような違いをもって、正誤を決めるべきではないというのが常用漢字表の考え方です。

折 折

ただし、「てへん」に関しては、文字を書く手や筆記用具の動きからすればはねる方が自然です。また、戦後の教科書を見ても、「うしへん」には、はねているものとはねていないものが両方見られるのに対し、「てへん」では、はねていない例がないなど、はねた形で書く方が慣用として定着しているという見方もできます。そういった点を踏まえると、はねた「てへん」の方が整った書き方として受け入れられやすいとも考えられます。当指針では、こうした点に配慮し、第2章と「字形比較表」には、とめた形の「てへん」は例示していません。

しかし、はねの有無などの細かい差異が漢字の字体の違いにまで及ばないような場合には、それを正誤の判断基準にしないというのが常用漢字表の考え方です。特に、不特定多数の人を対象とした入学試験や採用試験、検定試験等においては、漢字の字体の違いにまで及ぶ場合を除いて、はねの有無を正誤の判断基準にはしないという考え方に基づいた評価がなされることが望まれます。はねていない「てへん」の字であっても、誤りであると断じることはできません。(→Q38)

次のような例についても同様であり、「干」と「干<sup>う</sup>」など例外を除けば、いずれの漢字についても、はねるか、とめるかは、字体の違いに及ぶとまでは言えません。

寸 寸 手 手 丁 丁 月 月  
 力 力 可 可 独 独 列 列  
 水 水 性 性

⇒参照 第2章4(5)ア[P.54]

### Q73 はねるか、とめるか（「あなかんむり」など）

「空」のあなかんむりの5画目は、活字のようにはねて書いてはいけないのですか。

A 手書きの楷書では、とめる書き方が一般的ですが、明朝体では、はねる形になっています。明朝体のようにはねる形で手書きしても誤りではありません。

「字体についての解説」には、あなかんむりの書き方として、明朝体のようにはねる書き方を含む三つの例が次のように示されています。

穴 — 宀 宀 宀

楷書の習慣としては、とめる形の方が一般的という考え方もありますが、これらはいずれも誤りではありません。このほか、同様の構成要素を持つ「陸」、「俊」なども、同じように考えることができます。

⇒参照 第2章4(5)イ[P.55]

### Q74 単独の場合と構成要素になった場合との字形差（「女」）

「女」という漢字は、単独で使うときと、「おんなへん」で使うときで書き方に違いがあるのでしょうか。

A 印刷文字では、表し方に違いがあることが多いですが、手書きするときに、書き分ける必要はありません。また、印刷文字のように書いても誤りではありません。

印刷文字における「おんなへん」は、下記のように、「女」の字形と違うことが多いので、全く別の書き方をしなくてはいけないと考える人もいます。

女 好 姉 妹 姓

しかし、これは印刷文字のデザインの問題であり、「おんなへん」を手書きする際に、明朝体のように書く必要はありません。次に挙げるような例は、いずれも誤りではない書き方です。

好 好 好 好 姉 姉 姉 姉

**Q75 横画や縦画を点のように書いたら誤りか（「戸」、「今」、「帰」など）**

「戸」という字の1画目を点で「戸」のように書いています。しかし、印刷文字では1画目が横画の「戸」の形しか出てきません。これは、別の漢字なのでしょうか。

**A** 両者は同じ漢字です。明朝体では横画で「戸」の形が一般的ですが、手書きでは、点で書くことがあります。「帰」のように、縦画を点で書くことのある漢字もあります。

「字体についての解説」には、手書きの字形として三つの例が次のように示されています。

戸 — 戸 戸 戸

明朝体では横画になっているのが一般的ですが、手書きでは、1画目を点で書くことも、横画の長短が変わることもあります。点にする書き方は手書きの習慣特有のもので、現代の一般的な印刷文字の形とは一致しませんが、両者は同じものとして考えられます。同様に手書きの際に、画（線）で書いたり、点で書いたりされる部分を持つ漢字としては、次のようなものが挙げられます。

違 違 今 今 武 武

また、印刷文字においても、点で表されたり、画で表されたりする部分がある漢字があることが、「字体についての解説」に次のように例示されています。これらの漢字は、手書きの楷書でも、両方の字形で書かれることがあり、いずれも誤りではありません。

帰 帰 班 班 均 均

なお、平成22年の改定まで常用漢字であった「勺」のように、辞書によっては、点を横画にしたものが旧字体とされる漢字もあります。

⇒**参照** 第2章2-1(3)[P.27], 2-2(3)[P.31], 4(2)エ[P.44]

**Q76 簡易慣用字体が通用字体となった漢字の扱い（「曾」など）**

平成22年に常用漢字表に追加された「曾」を「曾」と書いてはいけのでしょうか。

**A** 固有名詞等を除き、手書き文字でも印刷文字でも「曾」を用いるのが常用漢字表の考え方です。「曾」はいわゆる康熙字典体として丸括弧の中に示されています。

平成22年の常用漢字表の改定では、追加字種のうち「曾」、「瘦」、「麵」の3文字については、「表外漢字字体表」（平成12年 国語審議会答申）の「印刷標準字体」（「曾」、「瘦」、「麵」）ではなく、「簡易慣用字体」が通用字体として採用されました。したがって、現在は、印刷文字においても、また、一般の社会生活における漢字使用や学校教育においても、原則として「曾」、「瘦」、「麵」の字体が用いられます。常用漢字表における「曾」、「瘦」、「麵」の字体は、「いわゆる康熙字典体」として扱われ、括弧内に入れて示されました。

したがって、一般の言葉を表す際には、印刷文字においても、「曾祖父」、「未曾有」などの

ように、「曾」を用いるというのが常用漢字表の考え方です。「曾」、「瘦」、「麵」の3文字については、人名などに用いる場合を除いて、今後、印刷においても、手書きにおいても、この字体を目安として、社会で広く用いていくことが望ましいと考えられます。

ただし、当面、不特定多数の人を対象とする入学試験や採用試験については、事前に採点の基準を示していない場合、「曾」に対する「曾」、「瘦」に対する「瘦」のような康熙字典体を用いて解答された際にも、誤りとはしない配慮が必要でしょう。

⇒**参照** 第2章5[P.59]

### Q77 康熙字典体で追加された字種の手書き

「字体についての解説」には「喩」などのいわゆる康熙字典体の漢字を明朝体の形のまま手書きしたものが挙げられていますが、歴史的にはそのような書き方は余り見られないのではないのでしょうか。

**A** 常用漢字表の通用字体は、一義的には印刷文字の字体です。手書きする際には、楷書の習慣に沿った書き方があります。しかし、印刷文字のまま書いても誤りではありません。

平成22年の常用漢字表の改定で追加された字種については、原則として「表外漢字字体表」（平成12年 国語審議会答申）の「印刷標準字体」が通用字体として採用されました。その中には、いわゆる康熙字典体が多くあります。

康熙字典体には、手書きの楷書で用いられてきた字体と異なるものが少なくありません。例えば、「比喻」の「喩」の右の部分（つくり）は、手書きする際には、「輸」や「愉」と同じように書かれるのが一般的でした。

「字体についての解説」では、次のように明朝体とともに手書きの楷書の習慣に倣った字形と括弧に入れた明朝体どおりの手書き文字を示した上で、手書きする際には「どちらの字形で書いても差しかえない」と説明しています。

明朝体      手書きの楷書の習慣に倣った字形      明朝体のおりの手書き

喩 — 喩 (喩)

一方、康熙字典体のおりに手書きするのは、望ましくないという考え方もあります。当指針でも、康熙字典体の場合に限らず、明朝体に代表される印刷文字の字形と手書きの楷書の字形との間には、習慣の違いがあるということを繰り返し述べてきました。手で書く際には、手書きの楷書の習慣に基づいた書き方があるという認識を広めていくことも大切でしょう。

しかし、手で書く場合にも、印刷文字どおりの書き方が用いられることがなかったわけではありません。例えば、「便箋」の「箋」は、手書きの習慣では「箋」のように書かれますが、それと共に、印刷文字どおりの手書きの仕方（「箋」）も用いられてきました。康熙字典体のおりに書いたとしても、それを誤りであるとするのは行き過ぎでしょう。

⇒**参照** 第2章5[P.59]



### Q78 片仮名やアルファベットとの関係

「オ」という字は「オ」と書くこともあると言いますが、そうすると片仮名の「オ」と見分けられないのではないのでしょうか。

A 片仮名などを含め、他の文字と混同されないように書くという意味で、細部に注意することが必要な場合もあります。ただし、文脈から判断していることも少なくありません。

「オ」という漢字を手書きする場合に、最終画を縦画と交わらないように書くと、片仮名の「オ」と同じように見えます。同様に、「又」という字の最終画をとめて書くと、片仮名の「又」と同じように、また、「丁」の縦画をはねずに書くと、アルファベットの「T」と同じように、見える場合があります。

オ オ 又 又 丁 T

これらは、それぞれの文字の骨組みに関わる違いではないので、どちらの書き方をしても誤りとは言えませんが、読む側に配慮した書き方が必要な場合もあるでしょう。

ただし、例えば次に挙げるように、「工事」の「工」と片仮名の「エ」,「学力」の「力」と片仮名の「カ」は、手書きの楷書ではほとんど同じように見えることがあります。

工 カ

このような場合には、文脈からどちらであるかを判断していることが多いと考えられますから、他の文字と混同されるおそれがあるというだけで、その文字を誤りであると断じるのは行き過ぎでしょう。